

徳良湖におけるブラックバス駆除作業のお手伝いと見学の報告

平成26年11月5日

特定非営利活動法人おもだか水辺
の生き物保全会員 大戸次男

はじめに

関係者の了解をいただいて、平成26年10月17日に徳良湖のブラックバス駆除作業のお手伝いと見学に行ってきました。



徳良湖を管理しているのは、「村山北部土地改良区」で、同団体は3年に1回、水位を下げて水門などの点検と補修を行っています。これに合わせて、尾花沢市は観光振興の一環として、ブラックバスの駆除を行っています。2002年から行われているようで、3年ごとに毎回、行われていたとすると、今回で5回目の駆除作業ということになります。インターネットで検索すると、[2002年](#)、[2008年](#)、[2011年](#)での駆除がヒットします。2005年だけは確認できませんでした。この駆除作業は、尾花沢市が「徳良湖釣愛会（通称 徳釣会）」に委託して実施されています。

1 駆除作業の様子

今年は10月上旬から湖水を抜き始めて、私が現場へ行く前日の16日がブラックバス駆除のピークだったようです。駆除作業の手順は、先ず水門を

開けて水を抜きます。その際、水門に網を仕掛けておいて、魚を捕獲します。網にかかった魚のうち、ブラックバスは駆除のためにバケツに入れていました。言うなれば、バケツに入れることが殺処分です。16日まではそのように水門に網を仕掛けていましたが、17日は大分、水位が下がりましたので、水門から離れた場所に網を新たに仕掛けることになり、やっと私もお手伝いできました。



水門から沖合の方に三角形に突きだして足場用の鉄パイプが既に組まれていて、そこに野球のバックネットのような丈夫なネットを仕掛けました。水位を下げたとは言っても、沖合は水位が腰以上の高さになりますし、足場を外すと泥の中に落ちてしまうので、結構、苦労しながらの作業でした。ネットを掛けている間も益々、水位が低下して、大物の鯉（正しくは「コイ」と書くべきですが、ここでは「鯉」と表記します。）たちの背鰭、腹鰭、胴体そのものが水面上に沢山、見えてきました。水位が下がり過ぎたために、鯉が少々、興奮気味だそうで、鯉を落ち着かせるために水門を閉じて水位を安定させました。さすが徳釣会は心得たもので、見事に鯉を落ち着かせました。



水門の近くには、バス釣り用の各種ルアーが落ちていました。これはほんの一部です。一度、ルアー拾いをして片づけた後で、もう一度残りを拾った

ものです。虫のような物、水中深く潜る物、水面で激しく音をたてる物等々多種です。



2 ブラックバスの駆除結果

17日の作業は上記のように行っただけですが、ブラックバスの新たな捕獲は全くありませんでした。ブラックバスの駆除は16日で終了してしまっただけになります。

バケツに入っていたブラックバスは、オオクチバス特有の体色を有していませんでしたので、てっきりコクチバスかと思っていましたが、よく見ると、「上あごの後端が眼球よりも後ろに伸びている」ことが分かりましたので、オオクチバスと同定できそうです。



バケツのブラックバスをビニールシートに並べて、個体数を数えました。最大約30cmの固体を筆頭にして、**220**匹が捕獲できていました。かなりの成果が上がったようです。最大の固体以外は、どれも同程度の体長で、二、三歳魚程度かなと見られます。なお、以前はブルーギルも捕獲されていたそうですが、近年は全く見えなくなったそうで、駆除作業の効果があって完全に駆除されたそうです。徳釣会のお手柄です。



3 その他の生物の状況と考察

17日に見た限りにおいては、ブラックバス以外の魚類は鯉とトウヨシノボリだけでした。

水がなくなった底面を見て回りました。すると、不思議なことには、これほどに大きい池なのに、他の生き物の姿が少な過ぎます。見つかったのは、大きなオオタニシが1個体、ドブガイと思われる二枚貝の殻だけでした。普通、池の水を抜くとタニシ類や二枚貝類が沢山、出てくるのですが、この状態では皆無と言っても過言ではありません。徳釣会の方のお話によりますと、これまでの駆除作業時には沢山の二枚貝が、コンクリート護岸の凹みで多数、見ることができ、それを誰かが拾っていたそうです。徳釣会の方も今年の様子には驚いておられました。タ

ニシや二枚貝は、強力な咽頭歯を持っている鯉によって食べられてしまうことがあるそうですが、以前の駆除作業においても、



鯉は多数が生息していながらも貝類がそれまで程度に見られたわけですので、鯉が原因とは考えにくいと思われます。

タニシが殆どいない理由の一つには、アオサギなどの水鳥による食餌が考えられます。アオサギはかなりのタニシを食べるようですので、水が引いて露わになったタニシを片っ端から食べてしまった可能性があります。実際に、徳良湖の南側にある個人所有の池の岸に、沢山のタニシの壊れた殻が散乱しているのを見ました。とてもその池に生息していたとは思えないほどの殻の量でした。池の所有者のお話ですと、アオサギが飛来していたとのことでしたので、徳良湖で食べたタニシの殻をこの池の辺で吐き捨てたことが考えられます。徳良湖の生態系を考えた場合、タニシなどが果たす役割は有機物の分解ということと鯉などの食物になる点において重要な役割を果たしていると思われるので、水を抜くときは貝類などを保護する必要があります。

二枚貝の大きさにもよるのかもしれませんが、アオサギが二枚貝を食害する可能

性は低いのではないかと思います。二枚貝はアオサギの口よりも大きい場合が多いからですし、そのようなお話を聞いたこともありません。ただ、今後、確認は必要だと思います。一般的に、二枚貝がいなくなった原因として考えられやすいのが寄生主のヨシノボリ類が絶滅している場合が考えられますが、徳良湖には、トウヨシノボリが生息しているようですので、このケースには当たらないようです。次に考えられるのが、これまでの水抜きの際に、二枚貝が徹底的に拾われて外部に持ち去られたことにより、次の世代を繁殖させる個体数の限界を越えてしまうぐらいに減少してしまったことが考えられます。同じようなケースが、尾花沢市内のT池でも見たことがあります。子どもたちの生き物観察会のために、池の水を抜きタニシと二枚貝が多数、捕まえられました。すると、翌年の観察会ではタニシと二枚貝が激減していました。さらに、前年度以上に底土からひどい腐敗臭が発生していました。T池では貝類の極端な減少によって、有機物の分解が行われずに腐敗してしまった可能性があります。

水深が浅い所には、トウヨシノボリらしき1～2cm程度の小さな魚が底面をつんつんと泳いでいましたが、捕獲しての確認をしませんでした。でも、ほぼ間違いなくトウヨシノボリだと思います。ブラックバスが、これほどまでに蔓延していながら、よくぞ生き延びていたものです。同じ尾花沢市内の野黒沢堤においても、ブラックバスだけのように見えながら、堤にちょろちょろと流れてくる水流に生き延びていましたので、トウヨシノボリは堤の本体ではなくてブラックバスが入ってこない細い流れで生き延びる特技があるのかもしれない。

4 徳釣会からお聞きしたその他のこと

徳釣会の方々は、お話を聞けば聞くほど如何に「お魚好き」で「魚に詳しい」かが分かります。色々と貴重なお話をしてくださいました。

(1) 水抜きの程度について

今回の水抜きは、写真で見られる程度の水位で停止しました。水門を全

開して、徹底的に水を抜くことは可能なのだそうですが、鯉などを守るためには、これが限度だということでした。これ以上に水を抜いてしまうと、鯉などが死んでしまう恐れがあるそうです。

以前には、水を徹底的に抜いて駆除作業をやったことがあるそうです。その際には、鯉などの保護すべき魚を捕まえて生簀に入れて、先に作っておいた池に移したそうです。ところが、その時に鯉などにかかなりのストレスを与えてしまったようで、多くの魚が死んでしまったということでした。徳釣会の方々は悲しそうにお話してくださいました。

そこで、翌年からは鯉などを移動しなくてもよいように、水位をある程度に留めて駆除作業をすることになりました。その場合、当然のこととして、ブラックバスも残存することになりますので、悔しいお気持ちが察せられます。難しい選択だったと思います。

(2) かつて生存していた魚種について

徳釣会は、ブラックバスが侵入する前の徳良湖を調査されていました。それによりますと、次のように19種もの魚類が生息していたそうです。

鯉	鮒	ハヤ	アブラハヤ	ドジョウ	ヨシノボリ	ナマズ
シナイモツゴ	ヤリタナゴ	シマドジョウ	ホトケドジョウ	ギギ		
メダカ	スナヤツメ					
ホンモロコ	ヘラブナ	オイカワ	タイリクバラタナゴ	ワカサギ		

黄色にマーキングした種類は、絶滅危惧種とされているもので6種もいました。私の推定では、ヤリタナゴと言っているものには、キタノアカヒレタビラも混じっている可能性があります。溪流の上流域に生息する種を除けば、ほぼ尾花沢市内に生育していた魚種のすべてが生息していたようです。これにヌカエビ、スジエビ等の甲殻類、タニシ、ドブガイ、マツカサガイ等の貝類、ゲンゴロウやヤゴ等の昆虫類を含めると、実に豊かな生態系があったこととなります。昔の徳良湖の楽しさは、この多様な生き物だったのです。なお、下線を付けたのは移入されたと思われる種です。この19種のうち、現在でも生息しているのは鯉、鮒、ナマズ及びヨ

シノボリ（トウヨシノボリ）の4種だけです。絶滅してしまった魚種に替わってと言うよりも絶滅させた張本人のブラックバスが闇放流されました。

ところで、「生息していた」とは言えませんが、新鶴子ダムにより丹生川上流が、徳良湖の水源の大きな一つになったために、徳良湖でもイワナが釣れたことがあるそうです。「一時的に紛れ込んだ」種とすべきでしょう。

かつて徳良湖に生息していた種の詳しいことは、これから徳釣会で整理してまとめる予定があるとのことでした。いつか拝見できることを期待したいと思います。

(3) ヘラブナ放流の方法について

徳良湖へヘラブナを放流する際には、大変な御努力をされているとのことでした。以前はヘラブナから採卵して、稚魚や幼魚を休耕田において自分たちで飼育してから徳良湖に放流していたそうです。最近尾花沢市内のある池で釣り大会を行い、それを徳良湖に放流しているそうです。それ以上のことはお話になりませんでした。大きな配慮の裏付けがあるものと思われます。例えば、ヘラブナ放流の際に西日本などから稚魚を購入すると、その中にブラックバスやブルーギル等の特定外来魚、または徳良湖にいないはずのない日本産の魚種が紛れている場合があります。それを避けるための御配慮かと思われます。重ね重ね感服します。

5 徳良湖の概要

尾花沢市のホームページから分かる概要は次のとおりです。

山形県尾花沢市二藤袋 面積約 26ha 周囲約 2.7km 最深部約 5.6m

農業用貯水池

[トップページに戻る](#)